「木育（もくいく）」は心の森づくり

煙山 泰子 *Written by Yasuko Kemuriyama* ● KEM 工房主宰、木育ファミリー代表

私たちのまわりでは、1枚の紙から家具や建物にいたるまで、木から生まれたものがたくさん使われています。でも、材料となった木が生きてきた森を想像できる人はどれだけいるでしょうか？　木に触っていると癒されるとか、木は優しくて心がなごむと言われますが、いま、現代人の五感のなかで最も失われているのが触覚なのだそうです。日本は豊かな森林に恵まれ、大昔から木を生活のなかで使い続けてきました。だから木に触れていると、眠っていた感性が目覚めるのでしょう。その感覚の原点は「なつかしさ」にもつながります。

ここ数年「木育」という新しい言葉が注目されるようになりました。木育とは「木とふれあい、木に学び、木と生きる」取り組みです。それは、子どもの頃から木を身近に使っていくことを通じて、人と木や森との関わりを主体的に考えられる豊かな心を育むことです。

木のタマゴ

たとえば、私がデザインした色々な種類の木のタマゴは、木材の色や重さ、木目の違いを感じるための遊具です。生命を感じさせる木のタマゴから、それを生んだ1本の木が過ごした永い森の時間を「手のなかの森」のように感じてもらいたいと思っています。ナラは硬くて強いどんぐりの木、渋い風合いのクルミは果実がリスの食料にもなっていることなどを語ると、だれもが穏やかに感触を楽しんでくれます。なかには、毎晩のようにタマゴを抱いて眠る子もいるとのこと。このようにさまざまな木のモノに触れて「これ、良いな～」と感じたものを、毎日触り続けてみてください。いつか、それが自分にとってかけがえのない大切なモノになるはずです。

身近な街路樹や公園にも目を向けてみましょう。1本の樹木が見せる四季の営みのなかにも、普段私たちが見過ごしている小さな自然の美しさと不思議に出会えるはずです。時には親子で森へ出かけて散歩をしたり、森の空気を深呼吸したりするだけでも「森って、いいね～」と共感できるでしょう。そんな経験を通して生き生きとした感性が育まれると、それは必ず「なんだろう？　なぜだろう？」という知的な興味や学びにつながります。

このような身近な体験から、人と木や森とのつながりを考える心が少しずつ養われていきます。木が育つのには何十年、何百年という時間がかかり、木材になってからもまた同じくらいの時間を生きることができます。人間の短いサイクルでこれらの自然と共に生きていくためには、私たち人間に賢さや慎ましさが求められるでしょう。

木育は人の心に木を植える、心の森づくりのようなもの。木育に決まったスタイルはありません。子どもからお年寄りまで、それぞれが「楽しい」「うれしい」と、素直に感じられるやり方で木育をはじめてみませんか。CEL

煙山 泰子（けむりやま・やすこ）

KEM工房主宰、木育ファミリー代表、北海道森林審議会委員。1955年北海道生まれ。77年北海道教育大学特設美術科（木材工芸）卒業。78年北海道教育大学教育専攻科修了。79年KEM工房開設。84年津別町木材工芸協同組合にて木工品開発指導を開始。同年網走郡津別町に「木のつべつの木デザイン計画」を提案し、以後、2004年まで「木による街づくり」に協力。05年北海道木育推進プロジェクト、木育をすすめる会「木育ファミリー」設立。
主な著書は、『木育の本』（共著、北海道新聞社）など。